

	<p>2020年(令和2年)2月29日発行</p> <p>No. 16</p> <p>公益社団法人 日本山岳会 山形支部  〒997-0034 鶴岡市本町 2-6-9  事務局長 佐藤 一広  TEL/FAX:0235-22-4079  編集: 河口 昭俊</p>
---	--

## 目 次

1	追 悼 水澤 富一郎さん 畠中 六左衛門さん 長岡 伸恭さん	No. 7734 No.13384 No.12340	木村喜代志 小野寺喜一郎 佐藤 映子	P 2 P 3 P 4
2	故 長岡 伸恭氏 遺作年賀状解題	No.15137	野堀 嘉裕	P 5
3	油絵展を顧みて	No.12531	推名 高夫	P 9
4	天地 間・すずきみそら共著『手長・足長の妖怪物語』のこと等	No.15525	河口 昭俊	P11
5	山形支部及び会員活動記録 (2018~2019 年度)		事務局	P12





### 追憶とは永遠に新たに、 そして永遠に尽きることなく

日本山岳会を通して、長い間お付き合いをさせていただきました。山形支部運営で行き詰まった時の相談役であり、心のよりどころでした。日本山岳会山形支部の舵取り役として、長年にわたり支え、力を注いでいただきましたことに、あらためて感謝申し上げます。

皇太子殿下も出席される日本山岳会の晩餐会では、首都圏で活躍されている県出身の著名な山仲間を折に触れ引き合わせて下さいました。これも水澤さんの交友関係の広さと深さによるものと驚嘆いたしております。

温厚な人柄で築かれた交友関係に加えて、豊富な経験に裏打ちされた人生観は悠々とした自然体で、誰もまねのできない水澤さん独自の世界でした。

7、8年ほど前、首都圏に住む山仲間が、経団連第四代会長土光氏の長男の方を、冬の蔵王にお連れしたことが二度、三度とありました。90歳という高齢と生活環境の違いなどから、私どもにはどのように対応すれば良いのか解らず困ったことがありました。この時、水澤さんに土光さんのお相手をお願いしておりました。ただ単に年齢が近いというだけでなく、妙に反りが合い、傍から見ても心地好い雰囲気の中で、楽しそうに語り合っておられました。そして、思い出したように連れ添ってスキーを楽しむ様子は、何とも言えない微笑ましい光景でした。早々に宿に戻っては酒を酌み交わし「年寄りに指図するのは土台無理なこと」と、気ままに過ごされておられました。

また、水澤さんはスキーと写真をご趣味とされておられました。先の土光さんとの出会い後に、今どきのスキーとウェアを新調され、ビデオカメラを駆使してスキー術の向上に努められていました。また、写真でいつも感心させられたのが、写真がはがきになって郵送されてくることでした。共有できた思い出を再認識させられたり、あるいは季節の移ろいに気付かせてもらったりと、細やかなお心遣いにいつも敬服させられておりました。

お付き合いを通して示唆に富んだご教示を沢山いただきました。これらを単に記憶に留めるだけではなく、新たなものを芽吹かせ、今後に向けての行動のエネルギーにさせていただきます。

私たちにとって永遠の夢追い人であった山形の 後藤 幹次 会長さん、鶴岡の 石井 貞吉 さんと 村上 勝太郎 さん、酒田の 斎藤 清吉 さん、そして先日仲間入りされた吹浦の 畠中 六左衛門 さんたちに迎えられ、賑やかに飲んで、語り合っ、一休みしながら仏になるための準備に勤しまれていることと思います。

最後に、素晴らしい時間を共有させていただきましたことに幸せを感じながら、深く感謝申し上げます。

ありがとうございました。

2018年8月22日

日本山岳会山形支部 木村 喜代志



「山の深さを知る男」  
故 畠中 六左衛門 氏に寄せて

公益社団法人日本山岳会会員 13384、前遊佐町長  
小野寺喜一郎

！けわしい山に登ってみたい、自分の道を極めたい、それは男の見果てぬ夢か、山に登ればその山の、山の向こうに待っている、山の深さを知るばかり！これは歌手北島三郎の歌「山」である。まさにこの歌のような人間であった。公益社団法人日本山岳会 5840 番永年会員で鳥海山をはじめ山々を知り尽くす岳人である。一方鳥海山麓の吹浦一帯の山林を所有し山林の下草刈り、間伐等々に頑固印の野良着をまとい手入れが行き届いた山林は一目で「六ゼンの山」と評された。

あなたとの出会いは50年も前になります！私は昭和40年代頃、食糧増産の先兵として勉強している時学生寮に地元佐町役場から毎月広報がおくられてきました。その広報に鳥海山岳会会員募集の記事が載っており、私も山登りを始めた頃であり故郷の山岳会にも籍を置きたいと思い即座に入会したところ鳥海山岳会のバッヂと会員証が送られてきたときのことは今でも覚えております。

その後学校の春休み、夏休みに帰るたびに鳥海山での山岳訓練があり六さん達先輩からは厳しくも楽しく豊かな経験に基づく指導を頂き益々山が好きになりました。

そんな出会いから卒業後は家業である農業を継ぐことになり今度は田んぼ、山林が隣というご縁からどっかりと農道に腰を下ろして鳥海山を前にしての山談議は楽しかったです。

確か昭和42年の山形県総合体育大会兼国体予選の山岳競技が飯豊連峰縦走で我が鳥海山岳会も参加し私は選手としてしかもチームリーダーを努めたものの、経験不足から監督である六さんの期待に応えるような結果をだすことが出来ませんでした。特にこの年の第22回国民大会における山形県山岳部門の県選手団の監督に就任していた六さんには申し訳なく思っておりました。それからは他の活動が忙しくなり一時期山から遠ざかっておりましたが再びあなたから日本山岳会員としてお誘いをうけ推薦までして頂きました。

あなたは常に山と自然と人を愛し、家業の農林業は勿論遊佐町森林組合長として、吹浦財産区（区有林約300畝）議長として持ち前の辣腕を發揮して頂きました。更には戦没者遺族会長として戦没者の慰霊と世界の平和と故郷の繁栄のため「誠心誠意」非凡なる才能を傾注して参りました。生前、今では幻の絶品である「もりたのピッケル」を「俺の形見」だ、として頂きました。大事に私の宝として預かせて戴きます！「山の深さと、人の道」のご指導に衷心より感謝して！

合掌



長岡さんに惜別の言葉を捧げます。

長岡さん 呼吸が楽になりましたか。身体の辛さも楽になり名前の通り伸び伸びと広々とした気持ちでゆっくりとしていらっしゃると思います。誰にも面倒をかけたくないという長岡イズムというか長岡美学は分からない訳ではないのですが、一人で頑張り過ぎたと思います。最期を病院で呼吸や身体の辛さを管理、緩和してもらえたことは、ほんとうに良かったと思います。水沢さんが「よ

お 長岡 来たが〜」、六左衛門さんが「長岡くーん」と迎えに出て酒盛りが始まっているのではないのでしょうか。

長岡さんと初めてお会いしたのは私が入会した年の支部晩餐会でした。「知ってるけどでも 知らねって 言えってが」とぶつぶつ言っている人がいて、山岳会にはおもしろいオジサンがいるなというのが第一印象でした。それから三十数年のお付き合いですが、なんと私は長岡さんのことを何も知らないのです。何故山が好きになったのか、いつ山岳会に入ったのか、好きな山は何処か等々。

自分のことは何も語らない人でしたね。

長岡さんと車座になって、面と向かって膝を突き合わせて、ワイワイお酒を飲んだこともないことに気づきました。いつも事務局として会の運営や一人ひとりのことを気遣って、お世話係に徹していました。

村上春樹氏がいう「雪かき仕事」をいつも黙って担っている人でした。「雪かき仕事」というのは、地味で容易でなくて、でも誰かがやらなければ世界のバランスが崩れてしまう、そういう仕事のことだそうです。日本山岳会山形支部の雪かき仕事を引き受けて、最後まで頑張ってくださいました。

ベニバナ国体の仕事、山形支部創立六十周年記念事業、中央分水嶺の仕事、最後になった支部報「山」など ほんとうに大きな足跡です。

先日、「 妻子がなくても、寂しくない。地位も名誉も欲しくない。

金がなくても、嘆かない。 」

というまさに長岡さんのことを言っているようなフレーズの山崎方代歌集を見つけました。おもしろがってくれそうで、病床の慰めになればと送る用意をしていた矢先でしたが、間に合いませんでした。

山を愛し、酒を愛し、蔵王の山小舎を愛し、温かいご兄弟に見守られ、絵の才能に恵まれ、幼馴染の友や沢山の山仲間にも愛され、逝くのは少し早かったけれど「good だべ〜」とホッと笑っていらっしゃるような気がします。

私がそちらに行くときは、いつものようにモタつく私を「何やってんだ。こっちはだべ」と向こう岸まで迎えに出て指示してくれるであろうことを確信しています。

それまで さようなら。

ほんとうにお世話になりました。有難うございました。心から御礼申し上げます。どうぞ安らかに眠りください。

令和元年 6月 1日

佐藤 映子

## 故 長岡 伸恭氏 遺作年賀状解題

山形支部長：野 堀 嘉 裕

公益社団法人日本山岳会山形支部の事務局長を長年歴任されてきた長岡伸恭氏が2019年5月30日に逝去されました。長岡氏の登山に関する経歴、知識や経験などは皆さんご承知の通りですが、工芸や絵画にも才能を発揮されてこられたことはあまり知られていません。本稿では長岡氏が毎年描かれてきた年賀状を顧みることで長岡氏の考え方を想像してみることにしましょう。なお、ここでご紹介する年賀状は、ご兄弟である長岡昭夫様に宛てた年賀状であり、昭夫氏のご了解を得て、デジタルデータ化したものの一部を使用させていただきました。ここに記して謝意を表します。

昭和52年(1977年)はおそらく版画で、コマクサ、ウスユキソウ等が描かれていてサインは「NN」となっている。黒地に白や白地に黒の配置が花の特徴を良く表現している。

昭和55(1980)年は月山山頂三角点の標高である1980を赤字で年号として表現したユニークな年賀状である。コピー機やパソコンのスキヤナーなど普及していなかったこの時期にどうやって地図の等高線や歩道、境界線等を描いたのだろうか。真に不思議な年賀状である。当時はまだ謄写版が使われていた時期だったのかもしれない。鉄筆で一本一本等高線を書いていたら相当

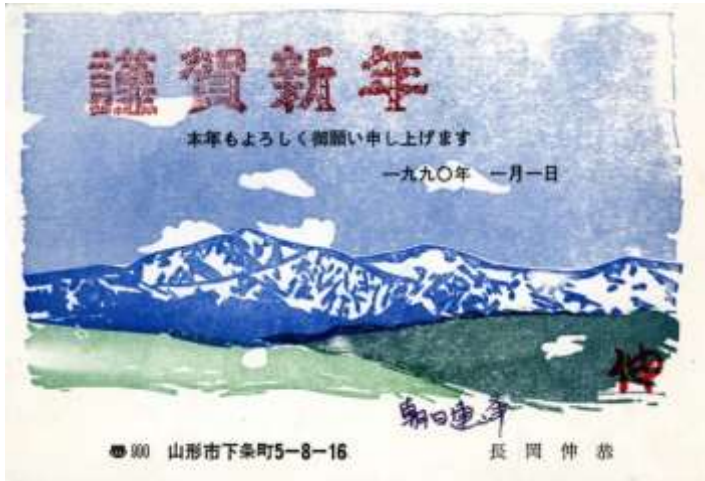




大変な作業だったに違いない。また、アマチュア無線のコールサインである「JA7WHQ」が右下に控えめに記載されているが、このコールサインから初期に免許を取得した無線愛好家であることがわかる。告別式には県内アマチュア無線の愛好家の方が弔辞を読んでおられたことを思い出した。アマチュア無線の普及にもご尽力されていたことがわかる。

昭和 58(1983)年は版画でスキーとストックが描かれているが、これを見て懐かしいと感じる方は相当年配の方とわかる。なぜなら、カバ材一枚板のスキーで、登山に使うシールがつけられるようになっているからだ。ビンディングはカンダハーである。ストックは竹製で、新雪を滑るためのトンキンと呼ばれるものだ。新年を表す文字は「賀春」と思われるが、賀の文字が加

えるの下に犬の字が使われている。このような文字は現実には存在しない。もしかしたら戌年なのかもしれないと思って調べてみたら猪年であった。



昭和 65(1990)年は朝日連峰が描かれているが、版画と水彩の合成と思われる。残雪と雲の白抜きを版画で、薄緑の手前の山並みは水彩を使って描いたと思われる。グラデーションの描き方が絶妙だといえる作品だ。サインは「伸」となっていておそらく手書きである。



平成 9(1997)年はアンナプルナ南壁が版画で描かれている。面白いのは山の描写だけではない。左下の樹木の描画が大変興味深い。おそらくこの木はゴヨウマツだ。枝振りがマツの仲間であることを良く表現している。また、梢が平らになっていることがわかるが、これは強風にさ

らされて生育していることを意味している。モンスーン時期にこの場所が過酷な環境であることがわかる貴重な作品といえるであろう。サインはなくネガティブ印で篆書の「伸」となっている。自分の作品を意識し始めたのだろうか。聞いてみなければわからないのが残念だ。

平成 12(2000)年は丹沢山地の鍋割山から見た富士山を描いた絵で、1999年11月27日にスケッチされている。手前に見える景色が白と青で描かれているが、この季節でも山並みは木々が見えるはずなので、雲海を描いているものと思われる。おそらく版画で、4色の重ね刷りと思われる。秋にスケッチした絵の中から年賀状を選んで描いているものと思われる。



ミレニアムと言われた平成 13(2001)年は八ヶ岳の赤岳が描かれている。スケッチは2000年11月4日だ。長岡氏は赤岳・中岳と記載しているが赤岳周辺に中岳という山はない。何かを勘違いされていたのかもしれない。描かれているのは左から権現岳、赤岳、横岳だと思われる。従って、スケッチしていた場所は小海線の佐久海ノ口周辺と考えられる。



平成 18(2006)年は秋田駒ヶ岳が描かれているが版画の要素が読み取れない。おそらくほとんど水彩で描かれているものと思われる。2005年9月17日に小白森山登山道の途中からスケッチされたことがわかる。この年から印が変わり、ポジティブの篆書で右から「伸恭」となっている。ご自分が画伯に変わったと自覚されたのかもしれない。





平成 25(2013)年は五色沼から見た月山である。2012年の11月10日スケッチは既に降雪季に入っているが、紅葉の木々も残っていて色鮮やかな景色となっている。ほとんど水彩で描かれているものと思われ、使われている色の種類が豊富になっている。



平成 26(2014)年は庄内の金峯山、八景台からみた母狩山である。平成 25 年 11 月 4 日の日付が記載されているのでスケッチしたのはこの日とわかる。手前の尾根に濃い青色の木々が描かれているが、これはキタゴヨウの特徴を良く表している。自然を見つめる目の確かさが表れたものだといえよう。



平成 31(2019)年は上高地から梓川左岸から見た北アルプス明神岳で2018年9月1日にスケッチした絵である。基礎的な部分を線画で、後から水彩で色を付けたものと思われる。色彩が多様で美しい。長岡氏は「それぞれの上高地」の名付け親であり、この年も長岡氏は上高地をそれぞれに楽しみながらこの絵のスケッチを描

いていたに違いない。山をこよなく愛し、その傍にあるいはその中に存在することを求めてやまなかった長岡氏の思いの一部を垣間見た気がする。この作品が長岡氏の遺作となってしまった。

これらの年賀状を振り返ってみると一作一作がクイズのようになっていることに気が付いた。どのように描いているのか、読む人に問いかけているのかも読めない。これらの絵を見ながら長岡氏を偲ぶひと時を過ごすのもよいのだろう。山形支部のホームページにはここで紹介できなかった年賀状が掲載されているので是非閲覧していただき、彼のクイズに挑戦してみしてほしい。



## 油 絵 展 を 顧 み て

会員番号 12531 推名 高夫

先の個展の折には、ご多忙中にもかかわらず、日本山岳会山形支部の会員はじめ高校時代の野球部の仲間、お世話になっている介護施設のスタッフ、絵画仲間など、多くの方々にご足労いただきましたことに、この場をお借りしてあらためてお礼申し上げます。ありがとうございました。

初めてみるヒマラヤの山々は衝撃的だった。霞んで見える高さから山々が聳えていた。全ての山が研ぎ澄まされた角度で天に向かっており、丸味を帯びた山稜、頂は見当たらない。日本の雪に覆われた単色の白ではない。白い雪を押し分け、青みを帯びた氷が見える。雪を拒む垂直の岩稜は山々に迫力を加味していた。

東北の山々には、暮らす人、見る人、登る人を包み込んでくれる優しさに似たものがある。ヒマラヤは、見る人を圧倒し、登る人を拒み、暮らす人に服従を強いる圧倒的な存在である。これらの美しく、威厳に満ちた山々の姿は、誰の脳裏にも奥深くまで入り込んでくる。しかし、時間の経過とともにこの鮮烈な印象も薄らいでいく。これを写真、絵画、詩などに表現することで、より、確かな記憶にしておきたい気持ちに駆られる。

定年退職後の時間活用をあれこれ考え、講座や教室に通っているうちに絵画に焦点を絞ることができた。しかし、ヒマラヤトレッキングツアーとなれば、室内での講座と違い腰を落ち着けて絵筆をとることはままならない。それで、同行者がカメラアングルを探る時間や休憩、食事の合間を縫って短時間で描くクロッキー、速写に精を出してきた。絵具類は機内持ち込み禁止のため、スケッチブックと濃い鉛筆を用意し、色づけなどの作業は、後日、記憶と写真や日記などを頼りに仕上げることにしてヒマラヤ行に備えた。

ところが、帰国後の作業段階になると、クロッキーと写真の角度の微妙な違い、それに伴う陽光の反射の違いによる色合い、記憶の色彩と写真の違いなどに悩まされた。また、抜けるような青空もとの圧倒的に大きな山々と澄んだ空気が距離感を狂わせた。日本で身についてい



ヒマラヤ慕情 F60

る遠近感の表現法の違いなどにも気づかされた。高山特有のヒマラヤ巒などの詳細になると、絵の具を塗っては削り、重ね合わせるなど、さらには使い古して先の丸まった絵筆を選ぶなどの試行錯誤もあった。

家族と絵画仲間の力添え、ディーサービススタッフの励ましなど多くの人々の支えで油絵展を実現できました。ところが展示してみると、ヒマラヤの山々に備わった美しさを通り越し

た厳しさ、抜けるような空の表現など到底満足いくものではなかった。これらを改善するには、真剣に絵と向き合いながら描き続けることは勿論だが、絵画教室の先生が説かれていた「展示会を二度三度と重ねる必要性」がおぼろげながらも感じ取れたことが大きな収穫であった。

ヒマラヤ行の後も色彩の豊かな南フランス、本来のスペインの姿を残す北西部へのスケッチ旅行を四回、五回と続けた。こちらは「スケッチ旅行」と銘打ったツアーだけに、全員で一斉に現地で描くことに集中できた。

脳梗塞を患って以来、身体の麻痺などでディーサービスに通う日々が続いているが、次回の「油絵展」を視野に入れての活動を続けている。



エベレスト街道 F100

2019/11/20



エベレストを描く - 推名 高夫 油絵展  
2019年4月9日(火)~14日(日)  
山形市諏訪町 ギャラリー 絵遊

天地 間・すずきみそら共著

## 『手長・足長の妖怪物語』のこと等

会報担当 河口 昭俊

天地間(てんち かん)氏こと前田直己氏(会員番号 10217)は平成 30 年 3 月、当時天真学園高等学校 3 年のすずきみそらさんと共著で、表題の絵本を出版した。あとがき(謝辞)によれば、前田氏が子どもの頃にお母様から聞いた昔話とのことであるが、ストーリーはぜひ絵本をお読みいただきたい。

この物語には、鳥海山麓・三崎半島の地名伝説や信仰の山としての鳥海山、そして鳥海山の火山活動(大爆発)等が織り交ぜられ、いくつかの興味深い話が展開されている。神仏習合の山としての鳥海山は、薬師如来と日光・月光両菩薩とされる。山頂を薬師瑠璃光如来として、西に月光川、東に「日向川」が流れているが、「日光川」ではない所以が面白い。

今年 1 月、私は初めて前田氏とお会いする機会を得た。この度の絵本出版の紹介について承諾をいただくためであったが、初対面で突然のお願いにもかかわらず時間を割いていただいた。絵本紹介は快諾を得、話題は前田氏の最近の研究を始めとして、民話、伝説、信仰、歴史から自然科学に至るまで多岐にわたった。たくさんのご教示をいただくとともに、前田氏の研究領域の広さと飽くなき探究姿勢に圧倒され、そして故郷庄内に対する熱い郷土愛を感じた。

現在前田氏は、遊佐町長の依頼もあり、絵本第 2 弾『アマハゲ物語』を出版するとともに、明治初期にいわゆるお雇い外国人として来日したドイツ人地質学者ナウマン(フォッサマグナ発見。ナウマンゾウに名を残す)が日本列島を地質調査した際に、鳥海山に登ったことを調べていた。ナウマンは鳥海山で見た景色を日本の最も美しい風景の一つとして紹介しているが、それはどんな風景なのか、何を見たのか。ぜひ山形支部でお聴きしたいものである。

※この度は、山岳同人グループのろしの佐藤昭子氏の仲介で前田氏のお話をお聞きすることができました。改めて前田・佐藤両氏に感謝申し上げます。



# 日本山岳会山形支部及び会員活動記録

2018（平成30年度）～2019（平成31／令和元年度）

事務局

## 2018(平成30)年

- 3月4日（日） 前田直己会員、絵本『手長・足長の妖怪物語』を出版
- 4月14日（土） 山形大学農学部シンポジウム「出羽三山の信仰と自然環境」  
前田直己会員が講演。演題「月山の来迎」
- 4月27日（金） 寒河江市の長岡山展望台に「学校から見える山イラストプレゼント」の展望図が設置される。
- 5月20日（日） CDブック『池田昭二 鳥海山山行記録1000』が出版される。  
（編集委員：粕谷俊矩会員、他）
- 6月20日（水） 野堀嘉裕支部長の論文「ドローンとGISを用いた蔵王樹氷原の害虫被害の範囲解析について」が日本山岳会会報『山』に掲載
- 8月6日（月） 第3回「学校から見える山イラストプレゼント」贈呈式。金山町と町内の3小学校に「展望図」「鳥瞰図」を贈呈（金山町役場）
- 8月19日（日） 梅津誠一会員、全酒田写真連盟写真コンテストで特選受賞。  
作品「屋根より高い」
- 9月12日（水） 前田直己会員、山形県産業賞を受賞
- 9月20～23日 梅本幸巳会員、佐藤一広会員が鶴岡市芸術祭・県民芸術会に水墨画を出品
- 11月29日～  
12月2日 瀬川昭会員、「第11回写団はぐろ会員写真展」を開催
- 11月22日（木） 前田直己会員が山形大学農学部「農学の夕べ」で講演。演題「ブロッケン現象について」

## 2019(平成31)年

- 1月16日（水） 木村喜代志会員、「読んで旅に出たくなる一紀行文で綴る世界の地誌一」を荘内日報に掲載（以後、複数回掲載）
- 3月11日（月） 野堀嘉裕支部長の論文「山形県庄内地方における林床処理によるクロマツ海岸林内へのショウロの誘導」が『山形大学紀要』に掲載
- 4月9日～14日 推名高夫会員、油絵展を開催（山形市、ギャラリー絵遊）
- 4月21日（日） 梅本幸巳会員、第52回日本水墨画展で東京都知事賞を受賞。  
作品「潮声」（四曲屏風）
- 5月1日（水） 令和改元
- 7月22日（月） 第4回「学校から見える山イラストプレゼント」贈呈式。飯豊町内の4小学校に「展望図」「鳥瞰図」を贈呈（飯豊町立添川小学校にて）
- 10月17日（木） 前田直己会員、山形大学農学部「農学の夕べ」で講演。演題「江戸時代以前の御来光について」
- 11月3日（日） 前田直己会員、「旭日双光章」を受章